

萩原朔太郎における〈吠える犬〉詩論

——月に吠える〈犬〉——

興津さくら

1 はじめに

『月に吠える』^①は一九一七〔大正六〕年二月に感情詩社・白日社から出版された。製作・発表期間で言えば一九一四〔大正三〕年八月頃から一九一五〔大正四〕年六月、そして約一年の空白期間を挟み、一九一六〔大正五〕年四月から一九一七〔大正六〕年二月までの作品を収録している詩集である。本詩集は、刊行当時から特に韻律の新しさを評価され、排斥されることなく受容された。詩集は七つの章から成り、各章はおおよそ同時期の作品をまとめて編成されている。そして、「竹とその哀傷」章には〈地面〉〈天〉〈懺悔〉、「くさつた蛤」章には〈腰から下のない病人〉と

「くさつた蛤」章、「見知らぬ犬」章に比べて配されている。置かれる章が異なるのは、先述したようにそれぞれの初出が「悲しい月夜」は『地上巡礼』一九一四〔大正三〕・二二、「ありあけ」は『ARS』一九一五〔大正四〕・四、「見知らぬ犬」は『感情』一九一七〔大正六〕・二と発表時期が異なることが原因だろう。悲しい月夜」から「見知らぬ犬」の間には沈黙期を挟み二年以上の時間が流れているのである。

さらに、のちに『蝶を夢む』(新潮社、一九二三〔大正二二〕・七)^②に収録される「吠える犬」(初出は『詩歌』一九一五〔大正四〕・二)を含めれば、『月に吠える』制作期に書かれた〈吠える犬〉詩は四篇と数えられる。章を隔てて詩集のうちに配されていることに表れているように、〈吠える犬〉は長期にわたって朔太郎の眼前に繰り返し現れたのである。つまり、時期を問わず現れる〈吠える犬〉は朔太郎にとって一過性ではない意味を持つていたと言えよう。

しかし、〈吠える犬〉が登場する「悲しい月夜」、「ありあけ」、「見知らぬ犬」の三篇は、同じ章ではなく「悲しい月夜」章と「くさつた蛤」章、「見知らぬ犬」章に分けて配されている。置かれる章が異なるのは、先述したようにそれぞれの初出が「悲しい

後述するように、先行論では〈犬〉を詩人の分身のように捉えて解釈する動きが主である。この点に筆者は異論を唱えない。その上で、そのとき詩集の題をもう一度見返し、〈吠える犬〉には〈月〉が不可欠であることを再び認識する必要がある。実際、〈吠

える犬」詩にはどの作にも必ず〈月〉が現れる。つまり、我々は〈吠える犬〉詩に直面するとき、〈犬〉のみを注視するのではなく、〈月〉をその解釈に織り込まなければならぬのではないか。そこで、本稿では、『月に吠える』期の〈吠える犬〉詩を横断的に読み、長期にわたって〈吠える犬〉詩が制作されたこと、〈犬〉と〈月〉が同時に描かれていることに注目したい。〈犬〉の描写の変遷と、〈犬〉と〈月〉の関係性の観点から、〈吠える犬〉詩の新たな解釈と朔太郎の『月に吠える』期の到達点を考察する。

2 朔太郎と〈吠える犬〉詩——詩人と〈犬〉

〈吠える犬〉詩については、詩集の題も『月に吠える』であることから朔太郎にとって重要な意味を持つものと思われる。実際、先行研究においても〈吠える犬〉を考察する記述は多い。ただ、〈吠える犬〉は先述のように長期間にわたり登場することに留意する必要がある。

「悲しい月夜」(『地上巡礼』一卷四号、一九一四〔大正三〕・一二)、「吠える犬」(『詩歌』五卷二号、一九一五〔大正四〕・二)、「ありあけ」(『ARS』創刊号、一九一四〔大正四〕・四)、「見しらぬ犬」(『感情』第二卷二号、一九一七〔大正六〕・二)には共通して〈吠える犬〉が配されている。この一連の詩群について初出を見ると、初めに発表された「悲しい月夜」から「見しらぬ犬」が発表されるまでには、先述したように二年以上の時間が隔てられていることがわかる。このように長期にわたって描かれ続けたことから、〈吠える犬〉は朔太郎にとって非常に重要な

意味を持つことが窺える。

悲しい月夜

ぬすつと犬めが、

くさつた波止場の月に吠えてゐる。

たましひが耳をすますと、

陰気くさい声をして、

黄いろい娘たちが合唱してゐる、

合唱してゐる、

波止場のくらい石垣で。

いつも、

なぜおれはこれなんだ、

犬よ、

青白いふしあはせの犬よ。

『月に吠える』収録形。初出は『地上巡礼』一卷四号、一九一四〔大正三〕・一二)

「悲しい月夜」は先述の通り、最初に書かれた〈吠える犬〉詩である。ここに見られる〈犬〉について、星野徹は「〈犬〉が詩人自身の〈ふしあはせ〉な姿の投影であるらしいことは直ちに理解される」(星野、一九七三・一一)⁵⁾、清岡卓行は「この詩においては、自分と犬をなんのためらいもなく重ね合わせようとする素直さが、ことのほか快く感じられる」(清岡、一九七四・一)⁶⁾と

述べ、〈犬〉には「詩人」が投影されていることを指摘する。
この「詩人」＝〈犬〉という解釈は、「吠える犬」の初出形からも読み取ることができる。

吠える犬

月夜の晩に、犬が墓地の墓標をめぐつて居る。

この遠い地球の中心に向かつて吠えるところの犬だ。

犬は透徹すべからざる地下に於て深くかくされたところの主人の金庫を感じることにより、金庫には翡翠及び夜光石を以て充たされたることを感能せることにより。

吠えるところの犬は、その心霊に於て明らかに白熱され、その心臓に於て蛍光線の如きものを肉身に透影する。

この青白き犬は前足を以て固き地面を掘らんとして焦心する。遠い、遠い、地下の世界に於て微動せるところのものを感得せることにより。

吠えるところの犬は感傷し、犬は疾患し、しかもその明らかに直視するところのものを掘らんとして月夜の墓地に焦心する。

吠えるところの言葉は『詩』である。

汝、忠貴なる、敏感なる、然れども全く、孤独なる犬よ。汝が吠えることにより、洞察なき隣人のために銃を以て撃たれるまで、汝が飢死するに及ぶまで、汝が『謎』を語ることを止めざる最後日まで。

吠えるところの犬は、青白き月夜に於ての「詩人」である。

（初出形。「詩歌」五卷二号、一九一五〔大正四〕・二）

第三聯に記述される「吠えるところの犬は、青白き月夜に於ての『詩人』である」という部分には、〈犬〉は「詩人」であることが明確に示されている。また、この解釈は、後述する各先行研究においても共通する見方である。

磯田光一と勝原晴希は〈犬〉についてこれらの詩篇で共通して行われる「吠える」という行為に着目している。磯田は「吠える犬」の本文から「何か本質的なものを求めて、そのために孤立した境涯におちいつてゆくのが詩人であるならば、ここに成立している『詩人』は求道的な理想主義者のイメージに近接している」（磯田、一九八六・二）と述べる。これに対して勝原は「啄木歌〈わが泣く〉や「幻影と謎」の〈恐怖したりき〉にみられる弱々しさに比して、直情的・焦燥の姿勢の顕著な「吠える犬」の犬のありようは、磯田光一の説く〈求道的な理想主義者のイメージ〉をすらはみ出してしまうものであろう。〈遠い地球の中心に向かつて吠えるところの犬〉＝『詩人』は、前節に述べた、〈危険なる境界線〉＝〈理性と狂気の境界〉にあつて〈直接真理に面接すること〉を願ひ、〈人間が未だ嘗て見ききしない遠方〉にある失われた〈実態〉を求める朔太郎自身であるにはかならない」（勝原、一九八七・八）というように磯田とは異なる解釈を示す。

これらの解釈は、〈詩人〉の性格的イメージこそ異なるものの、本質や実体といった犬が追求する対象に関する考えは似通っている。ここで、どちらも引用している「吠える犬」本文を見ると、

「焦心する」の語が繰り返し用いられていることに気付く。そのため、ここでの〈詩人〉の性格には、〈求道的な理想主義者のイメージ〉というよりも勝原の言う〈危険なる境界線〉上の朔太郎自身という解釈の方が適しているように思われる。

しかし、「悲しい月夜」や「ありあけ」においては、この掘るという動作や〈犬〉の焦燥は描写されない。ここにはただ背景の暗鬱さや悲壮感が漂うのみであり、〈犬〉がとるのは吠えるという行為だけである。そのとき、吠える行為には何が託されているのか。この点については主に「4 朔太郎と〈月〉／〈犬〉と〈月〉の逆転」以降で扱いたい。

そしてここで注意したいのが、詩人と〈犬〉の関係性は、朔太郎の詩のみにおける問題ではないということである。梁東国は「明治末期の公的使命感が薄くなるにつれて、彷徨う若者たちは「奪われた青春」の感情を抱くに至り、自己の内面を直視した。その時、当然ながら現れてくる自己憐憫、もしくは自己虐待の心情が〈犬〉や〈吠える犬〉に譬えられたのである」(梁、一九九三・一二)と述べる。ここでは、〈犬〉の登場は単なる流行ではなく詩人の中の同化・異化作用によるものであるとし、やはり詩人と〈犬〉が深く結びついていることが指摘されている。そして、その要因としてその時代背景を挙げている。では、明治末期から昭和初期にかけてみられたという〈吠える犬〉詩で朔太郎の詩が他作品と異なる点はあるのか。ここからは〈疾患〉と〈月〉に見られる朔太郎の独自性と、その意味合いについて考察していく。

3 「ありあけ」という境界線——病める〈犬〉の出現

朔太郎の〈吠える犬〉詩において、他の詩人の作品と異なる様相を見せているのは、やはり〈犬〉が〈疾患〉しているところにあるだろう(注・以下〈疾患〉・〈病〉・〈病気〉の三通りの表記をする箇所があるが、本稿では同義として扱うものとする)。しかし、朔太郎の一連の〈吠える犬〉詩において、〈疾患〉の意味するところや度合いにはやや変化があるように思われる。本節では、〈犬〉の色彩から〈犬〉に付与される〈疾患〉について概観する。また、このことについては時系列を整理し、作品を大まかに区分しながら考えていきたい。

那珂太郎『萩原朔太郎詩私解』(小澤書店、一九八五)によると、『月に吠える』の製作期間は次のように大きく四つに分割される。

【第一期】

大正三年八月から十一月にかけて。この期は、なかばは「愛憐詩篇」(のちに『純情小曲集』所収)体とかさなり、やがて方法的にも主題的にも多くを試みつつ、次第に『月に吠える』の本質形成へ移行していく時期(作者二十七―八歳。満年齢による。以下同じ)。

【第二期】

三年十二月から翌四年四月にかけて(作品の誌上発表は六月に及ぶ)。この約五箇月間は、創造力の飛躍的噴出を示し、質的にも量的にも最も実り多く、

『月に吠える』の本質が形成された時期（二十八歳）。

【第三期】

四年五月以降一年近くの空白期を含んで、翌五年十一月に至る。この間、詩誌「感情」の創刊号発表の「虹を追ふひと」が労作され、作品は数において極めて少く、『月に吠える』体から『青猫』体への移行が準備される（二十八―三十歳）。

【第四期】

たぶん五年末の約一箇月間（作品の誌上发表は翌六年一・二月）。すでにこの期は実質的には『青猫』の方に近い（三十歳）。

ここで、那珂による区分の中に、さらに線を引きたい。その境界線は、大正四年四月である。なぜなら、朔太郎論ではしばしば大正四年初頭の〈浄罪詩篇〉や同年四月から六月の〈神經詩篇〉にフォーカスが当てられるが、このふたつの期間の詩の傾向には大きく隔たりがあるからだ。

これに従って〈吠える犬〉詩を時期によって分類してみる。すると、〈吠える犬〉詩群は(1)「悲しい月夜」と「吠える犬」（それぞれ第二期の大正三・一二、大正四・二発表、〈神經詩篇〉以前の作）、(2)「ありあけ」（第二期の大正四・四発表、〈神經詩篇〉以後の作）、(3)「見しらぬ犬」（第三期の大正六・二発表作）の三つのグループに分けられる。

「悲しい月夜」と「吠える犬」は、先述したように〈神經詩篇〉期に入る前の作品である。この〈神經詩篇〉と呼ばれる作品群は主に「くさつた蛤」章に収録されている作品を指す。その「くさ

つた蛤」章の作品の中で最初期に発表されたのが「ありあけ」なのである。そして、「悲しい月夜」「吠える犬」と「ありあけ」というふたつのグループの間において、〈犬〉の姿や印象に関する描写には重要な変化が起こっている。それは、先述した通り、〈病〉の描写である。

「悲しい月夜」で描写される〈犬〉は「ぬすつと犬」と「青白いふしあはせな犬」である。坂井明彦によると、「青白い」という色彩は、朔太郎詩において〈宗教的性格〉を持つ「青」と区別され、「病氣」を担った朔太郎自身を表象する色彩である「白」に近い用法で登場する（坂井、二〇〇二）¹⁰。「吠える犬」では初出形に「犬は疾患し」と〈病〉がやや立ち現れるものの、それは掘る・吠えるといった動作の中に埋没してしまう。さらにやや時間は隔たっているものの、「吠える犬」の決定稿において〈病〉の描写は削除され、「青白い犬」という色彩による象徴の表現になる。つまり、「悲しい月夜」同様の〈犬〉にまで〈病〉を示唆するレベルが落とされている。

以上のことから、「悲しい月夜」の段階で〈病める犬〉というひとつのカテゴリとも言える主題が既に現れつつあったとも言えよう。しかし、後述する「ありあけ」と比較すると〈病〉の要素は非常に概念的である。それゆえに強い〈病〉性よりも周囲の景色や犬の動作が押し出されてしまう。

ありあけ

ながい疾患のいたみから、

その顔はくもの巢だらけとなり、
腰からしたは影のやうに消えてしまひ、
腰からうへには藪が生え、
手が腐れ、

身体いちめんがじつにめちやくちやなり、

ああ、けふも月が出で、

有明の月が空に出で、

そのほんぼりのやうなうすらあかりで、

畸形の白犬が吠えている。

しのめちかく、

さみしい道路の方で吠える犬だよ。

『月に吠える』収録形。初出は『ARS』創刊号、一
九一五〔大正四〕・四)

「ありあけ」では「畸形の白犬」の表現から新たな〈疾患〉の要素の出現を読み取ることができ。「畸形」という明確で外部から視覚的に判別できる上に身体的な痛みを伴うとも思われる〈病〉が含まれるのである。これによって、「ありあけ」では前半部における作中主体である作者の身体の異変と「畸形の白犬」が結び付けられる。また、その〈病〉が如何なるものか、「くもの巢」や「影」、「藪」の語から、不明瞭で薄暗く鬱蒼とした精神状態であるという詳細が朔太郎詩の中でようやく語られるようになるのである。初出形ではこの「藪」は〈浄罪詩篇〉の代名詞とも言える「竹」であった。それを詩集収録時に「藪」に改稿したことからも、朔太郎の自意識や心象風景が、〈浄罪詩篇〉的な鋭

さから〈神経詩篇〉的な〈疾患〉や絨毛のイメージの世界へと移っていったことは見やすい。

その後、「ありあけ」から「見しらぬ犬」の間には、発表を中断していた空白期を挟む。

見しらぬ犬

この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる、

みすばらしい、後足でびつこをひいてある不具の犬のかげだ。

ああ、わたしはどこへ行くのか知らない、

わたしのゆく道路の方角では、

長屋の屋根がべらべらと風にふかれてゐる、

道ばたの陰気な空地では、

ひからびた草の葉つばがしなしなとほそくうごいて居る。

ああ、わたしはどこへ行くのか知らない、

おほきな、いきもののやうな月が、ほんやりと行手に浮んで

ゐる、

さうして背後のさびしい往来では、

犬のほそながい尻尾の先が地べたの上をひきずつて居る。

ああ、どこまでも、どこまでも、

この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる、

きたならしい地べたを這ひまはつて、

わたしの背後で後足をひきずつてゐる病気の犬だ、

とほく、ながく、かなしげにおびえながら、
さびしい空の月に向かつて遠白く吠えるふしあはせの犬のか
げだ。

〔月に吠える〕収録形。初出は『感情』第二巻第二号、
一九一七〔大正六〕・二)

「見しらぬ犬」における〈犬〉は、「後足をひきずつてゐる病
気の犬」と病気の描写こそあるものの、結びではまた「ふしあは
せの犬」に帰着し、〈疾患〉という〈犬〉の特性が薄められてし
まっている。さらには、「見もしらぬ犬」というように詩人と犬
の間に隔絶が起きる。他の作品と同様に吠える描写は見られるも
の、犬の行為からの攻撃性や力は失われ、『月に吠える』自序
にいう「影」のように作者のあとをついていくばかりになつてし
まう。

4 朔太郎と〈月〉／〈犬〉と〈月〉の逆転

また、清岡は「詩人と犬は、いわば月を媒介としてぬきさしな
らぬぐあいに契合しており、その効果は、他の詩人たちの世界に
それと似たものをもとめることができなほど、実に独特である」
〔清岡、一九七四・一〕¹⁾と述べ、近代詩人に好んで描かれた〈吠
える犬〉詩の朔太郎における独自性として月を挙げる²⁾。

媒介となる〈月〉という記述に見えるように、ここで〈月〉は
朔太郎の〈吠える犬〉詩に不可欠なものであると捉えられてい
る。〈月〉は〈犬〉と周囲の景色を媒介し、〈犬〉と詩人を媒介す

る。つまり、〈吠える犬〉詩において〈月〉は不可欠であり、そ
れぞれの題材を結びつける役割を担っている。

しかし、朔太郎詩全体においての〈月〉の役割は、「媒介」だ
けではないようである。朔太郎詩全体の〈月〉を概観することで、
〈月〉そのものが担う意味についても考える必要があるだろう。

この、〈月〉が何を意味するかという点について、安藤靖彦
は「この「悲しい月夜」の月が、「蛙の死」や「ありあけ」や「白
い月」やの月を経て、「月影ある人生へ」の月に到っていること
は確かである。そして、月は形而上学的な一切の敗滅のちにあ
るものであり、幼年思慕篇「蛙の死」や幼年思慕詩篇「白い月」
に徴すれば朔太郎の原風景そのものである」〔安藤、一九八九〕³⁾
と述べる。つまり、朔太郎にとつての〈月〉は原風景的なもので
あり、他の一切のものを超越した存在であるということになる。
しかし、「白い月」における月の描写には浅いところがあると言
わざるを得ない。突然現れる月ではあるが、「幼童思慕詩篇」と
いうエピソードから、それ以外の風景との脈絡がみられなくとも
重要であることを訴えかけることに成功したに過ぎないだろう。
その点、「蛙の死」での月の描写は周囲との調和が上手く取れて
いる。まるくなつた子どもたちの陣形は満月を想起させ、血だら
けの手と共に上がる月は、夕焼けの真つ赤な空の中で赤く輝く。
そして、丘の上の人間の顔に真つ黒な影を落とす。この極めて激
しく統一された色彩の中で、月は確かに大きく不気味にその存在
を主張しているのが読み取れるだろう。そして、そのように超大
な〈月〉は〈犬〉の詩において媒介としてのみ存在しているのだ
ろうか。〈吠える犬〉詩には多く月が現れる。〈犬〉の姿は〈月〉

に照らされることによつてその輪郭を顕わにする。そうであるならば、〈犬〉の〈疾患〉による変遷にも〈月〉は関係している可能性が出てくるだろう。さらに、〈月〉と〈犬〉との関係に立ち返るならば、〈犬〉はこの〈月〉という超大な存在に脅えて吠えているのであると朔太郎本人が『月に吠える』の序に記している。

過去は私にとつて苦しい思ひ出である。過去は焦燥と無為と悩める心肉との不吉な悪夢であつた。／月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する犬の心に、月は青白い幽霊のやうな不吉の謎である。犬は遠吠えをする。／私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のあとを追つて来ないやうに。

ところで、この『月に吠える』の自序の初出は、『詩歌』上、大正六年一月のことである。とすると、ここでの〈月〉や〈犬〉の意味するところの役割は、大正三年一二月発表の「悲しい月夜」より、大正六年二月発表の「見しらぬ犬」に近いと言える。

ここでいう「過去は焦燥と無為と悩める心肉との不吉な悪夢」は、「吠える犬」において金庫を掘り返そうと焦燥する犬を想起させる。しかし、それを「過去」であり「悪夢」であつたと朔太郎は扱っていることがわかる。そして、〈詩人〉≡〈犬〉の構図に当てはめるとき、月に吠える犬——すなわち朔太郎は、月によつて現出した自らの影を恐れる。これは非常に「見しらぬ犬」に描かれる風景に似ている。次の段落において「私自身の陰鬱な影」

という言葉及がなされていることから、このことは明らかだろう。青白い幽霊のやうな月は、夜になるたびに繰り返し現れる。それによつて、自分自身の影、つまり朔太郎の癒えない苦悩や〈疾患〉のほんやりとした影も繰り返し現れる。この「不吉の謎」とは、癒えない〈疾患〉を繰り返し朔太郎に突きつける何者かを指すのだろう。

そして『月に吠える』自序における〈月〉と〈犬〉の関係について、勝原の論は非常に的確であるように思われる。勝原は「吠える犬」が〈吠える犬〉詩の原型であることを確認した上で「ここではむしろ、〈犬〉こそが〈謎〉を語っている当のものである。未知に向かう言葉はしばしばそれ自体が未知のものをはらむからである」(勝原、一九八七・八)と述べる。つまりここには、〈吠える犬〉詩における〈犬〉と〈月〉の担う役割に逆転のような現象が起きていることが指摘されているのである。

ここで、時間経過による役割の逆転を考えると、「吠える犬」という作品は注意して読まなければならない。なぜなら、「吠える犬」は『蝶を夢む』(一九二三(大正一二)・七)に収録される際に大幅に修正されたからである。「吠える犬」の改稿された本文は、改めて検討する必要があるだろう。

吠える犬

月夜の晩に、犬が墓地をうろついてゐる。

この遠い、地球の中心に向かつて吠えるところの犬だ。

犬は透視すべからざる地下に於て、深くかくされたところ

の金庫を感知することにより。
金庫には翡翠及び夜光石をもつて充たされることを感応せることにより。

吠えるところの犬は、その心霊に於てあきらかに白熱され、その心臓からは蛍光線の放射のごときものを透影する。

この青白い犬は、前足をもつて堅い地面を掘らんとして焦心する。

遠い、遠い、地下の世界において微動するものを感応することにより。

吠えるところの犬は哀傷し、狂号し、その明らかに直視するものを掘らんとして、かなしい月夜の墓地に焦心する。

吠えるところの犬は人である。

なんぢ、忠実なる、敏感なる、しかれどもまつたく孤独なる犬よ。

汝が吠えることにより、病見をもつた隣人のために銃をもつて撃たれるまで。

吠えるところの犬は、青白き月夜においての人である。

〔蝶を夢む〕収録形。一九二三（大正一二・七）

まず、初出形では「吠えるところの言葉は『詩』である」とさ
れていた箇所注目する。この箇所は詩集収録形において「吠え
るところの犬は人である」と改められ、吠えるという行為に着目
するのか、主体に着目するのかというフォーカスを当てる点が変
えられる。また、末文も「詩人」が「人」に改められている。

つまり、この推敲によって「詩」の要素が取り除かれていること
がわかる。これはより普遍的な表現になったということであり、
作者の影が薄まったということでもあるだろう。

特に『詩』・『謎』・『詩人』の三つの二重鉤の語はすべて詩集収
録形において変更・削除されている。二重鉤で表現したところや、
『月に吠える』自序で『謎』に言及しているようにこれらの語は
朔太郎の詩に関連している。初出形のこの箇所には作者の強い
メッセージが感じられるものの、やや冗長で独り善がりな表現で
あることは否めない。このことから、普遍性の獲得の意もあり、
詩集収録形ではこれらの語が削除されたことが推測される。

このように作者の個人性を薄めた上で、以下のような修正も加
えられる。詩集収録形は全体的に口語体に改められ、第一聯の末
文は、初出から詩集収録形で「感傷」が「哀傷」に、「疾患」が
「狂号」にそれぞれ改められ、また、「月夜の墓地」に「かなし
い」という形容が付加される。つまり、初出が客観的であるのに
対し、詩集収録形はより主観的である。この主観性は、しかし作
者の個人性を回復するような性質のものではない。これらの形容
は読者それぞれの主観として、読み手の心に入り込む効果を持つ
ことに成功している。

以上の推敲は、勝原の指摘した「〈犬〉こそが〈謎〉を語る存
在である」という〈犬〉と〈月〉の役割の逆転現象に関わると思
われる。先にこの現象は〈吠える犬〉詩の変遷によって逆転した
ものと述べた。しかし、実際は逆転現象でない事態が発生したの
ではないか。つまり、〈吠える犬〉詩によって繰り返し〈犬〉と
〈月〉が係わり続けた結果、〈犬〉が吠えることによって〈謎〉

を語っていると思われるものが、月による影こそが〈謎〉であつたことに朔太郎が気付いたということなのではないか。そのように考えれば、だからこそ、『蝶を夢む』に収録される過程でこの間違つた記述が訂正されたのだと考えることができる。

5 衰弱する〈犬〉と〈影〉

「見しらぬ犬」では、〈犬〉はその攻撃性を喪失し、作中主体である「私」のあとをついていくばかりになるということは先に指摘した。また、詩集自序から、「見しらぬ犬」の段階では〈犬〉と〈月〉の関係が原型（すなわち「悲しい月夜」や「吠える犬」とは逆転しているものの、その逆転は朔太郎の気付きによるものではないかということも先に見てきた通りである。

この節では、〈犬〉の攻撃性の喪失について改めて検討するところから〈犬〉の衰弱と〈影〉について考えていく。「見しらぬ犬」での〈犬〉の攻撃性の喪失を見るために、まずは「ありあけ」での〈犬〉の様子を確認する。「ありあけ」では、「ながい疾患のいたみ」「身体いちめんがじつにめちやくちやなり」というような激しい痛みが描かれる。この「ながい疾患のいたみ」の箇所は、関口典子が指摘するように大正三年期の〈疾患詩篇〉や〈浄罪詩篇〉を経て快癒しなかつた〈疾患〉を指すと思われる（関口、一九七八¹³）。

「見しらぬ犬」では、「吠える犬」に見られたような焦燥感はいくも描かれることがない。「みすばらしい、後足でびつこをひいてゐる不具の犬のかげだ」「犬のほそながい尻尾の先が地べたの

上をひきずつてゐる」「きたならしい地べたを這ひまわつて」という描写からは、〈犬〉が最早普通に歩くこともかなわない身体の状態であることが伺える。ただし、「ありあけ」に見られるような激しい痛みもここにはない。つまり「ありあけ」では、〈犬〉に痛みを感じることができただけの生命力がまだあるのだといえる。逆に「見しらぬ犬」での身体をひきずる様子は、激しい痛みをも超越した身体の麻痺を思わせる。この点からは、〈犬〉の衰えや衰弱を読み取ることができる。

そして、「見しらぬ犬」において「私」という視点から語ることは、「何が〈詩人〉か」という〈犬〉を構成する要素を〈犬〉から奪う。そして、「見もしらぬ犬」を繰り返して語つたとき、その〈犬〉は最早「見もしらぬ」存在ではなくなつていく。それは、〈犬〉を知つていく過程であり、〈犬〉と「私」の関係性——ひいては詩それ自体の蓄積である。語りは「見しらぬ犬」を、〈吠える犬〉詩全体を通して〈犬〉を対象化し向き合つてきた。その結末に導き出された行動は、自序に言う「釘付け」である。それは、「ふしあはせ」を動機に自身から〈犬〉を切り離すことであつた。

切り離す行為の結果を見る前に、「かげ」について考察を行う。文学史の会編『近代詩集の探究——その解釈と分析——』（学燈社、一九六二）では、「吠える犬」における「墓地」の描写が「先祖」及び「けちゑん」に結びつくことや、「見知らぬ犬のかげ」の描写が草稿断片の先祖の行列と似る点、先祖の行列には「あなた方の疾患原理をつたへるために／お気の毒だが私は生きてゐる」と叫び対立する姿勢をとる点から、「見知らぬ犬のかげ」

は「疾患原理を遺伝する先祖の亡霊」だと考察する。先に結論を述べると、「かげ」が〈疾患〉に関わるものであるという点については本論でも同じ立場を取りたい。そして凶的に考察すること、その「かげ」は「先祖」「けちん」といった自らに関わりながらも外部的な存在というより、自らの内的なものに起因するものであることを示していく。

「見しらぬ犬」に見える「かげ」の語は、詩集自序において「月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである」というように、〈犬〉の恐れの対象であると説明される。この影は、「見しらぬ犬」本文に見られるように、本人の意思にかかわらず「あとをついてくる」。「見しらぬ犬」での〈犬〉もまた、「私」のあとをついてくる。そして本文では「不具の犬のかげだ」「ふしあはせの犬のかげだ」というように〈犬〉の影についても言及される。つまり、ここには「私」と「私」のあとをついてくる〈犬〉と〈犬〉の影が存在する。

この状況で問題になるのが、詩集自序における「月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。(中略)私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のあとを追つてこないやうに」という箇所である。これを踏まえると、まず「私のあとをついてくる〈犬〉が「犬」の影」に恐れて吠えるという関係が成立する。さらに詩集自序の「過去は焦燥と無為と悩める心肉との不吉な悪夢であった」という箇所からは「吠える犬」における「前足をもつて堅い地面を掘らんとして焦心する」〈犬〉を想起させる。そして、「悩める心肉」は文字通り心身の〈疾患〉を指すのだろう。つまり、「吠える犬」

での焦燥を見せる〈犬〉や「ありあけ」での激しい〈疾患〉を味わう〈犬〉をここでは「過去」のものとして扱っているのである。このように〈犬〉は過去とすることで、「見しらぬ犬」における詩人と〈犬〉の隔絶という現象を説明できるのではないか。

詩集自序では「私は私自身の陰鬱な影を月夜の地上に釘づけにしてしまひたい」と述べられている。ここでは試みに、この「私自身の陰鬱な影」を、〈犬〉と〈犬の影〉のどちらも含むものとしてみる。そうすると、「悲しい月夜」から「ありあけ」において「ふしあはせ」や〈疾患〉を担った〈犬〉を、その〈犬〉が怯えた影ごと、過去のものとして自身から切り離そうとする朔太郎の姿が浮かび上がる。それが、「見しらぬ犬」において「この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる」というように〈犬〉を外部から眺める人間の視点として描かれるのである。「私」のあとを〈犬〉はどこまでも影のようについてくる。そのとき、〈犬〉自体が影の性質を帯びてくる。〈犬〉が恐れ怯えた影に、〈犬〉自体が「私の影」として成り果てる構図は、自序に著されているものと変わりない。そして、詩集自序においても「見しらぬ犬」においても、朔太郎は実際にその影を切り離すことに成功してはいない。

ここに、『月に吠える』期の朔太郎の到達点、或いは限界が見出せる。詩人「犬」は、元々〈謎〉——繰り返される癒えない〈疾患〉——を自ら語っていた。それが、『月に吠える』末期に至って自らの外部である〈月〉に〈謎〉を語るということを託してしまう。さらには、自らの影——自分自身の「ふしあはせ」な過去をも切り離そうとする。

休筆以前、〈疾患詩篇〉から〈浄罪詩篇〉、〈神經詩篇〉に至るまで、朔太郎は〈疾患〉を繰り返し詩の主題に置き、詩の中で自らそれを語ってきた。それは、〈疾患〉という苦しみから逃れようとする悲鳴のようなものでもあったのだらう。朔太郎は、「二種の発光体¹⁵⁾」と題する文に次のように記す。

月、星、寶石、ラジウム等の夜間に於て美しき放射線を発光する由所は、彼等が昼間に於て太陽の光線を吸収するからである。然るに、自然界の生物の中には、個体それ自身の物理的又は化学的作用によつて自然発光する所のものがある。たとへばある種の光り藻は、暗い洞窟内に於て、絶えず美しい緑金色の光を拡散してゐる。この種の光り藻は絶対に太陽の光線を受けない。ただ彼自身の自立的作用によつて青白く発光するのである。／人間界に於ても我我はまたこの二つの區別を考へる。／「寶石の詩人」と「光り藻の詩人」と。／彼等は共に美しい。けれども彼等の光はその発光体の素質を全く異にしてゐる。一方は自然から享受する所のもので、一方は彼自身の個体から自発的に放射する所のもの。一方は健康体の眩しい美しさで、一方は病的の夢みるごとき美しさ。

ここでは〈月〉は健康体の象徴とされている。また、「吠える犬」の中に見られる「翡翠」や「夜光石」も同類である。〈健康体の眩しい美しさ〉を希求しながら、それによつて自らの〈疾患〉がかえつて映し出される。〈健康体の眩しい美しさ〉は〈疾患する犬〉にとつて手の届かない遠い空にある。それは、自らの〈疾

患〉を朔太郎に突きつけると共に、自らとは明らかに異なる性質を持つている——理解しがたいものであるという点で、「青白い幽霊のやうな不吉の謎」であつた(ことに朔太郎は気付いた)のだらう。

しかし、「見しらぬ犬」での〈犬〉は、非常に衰弱しながらも吠えることをやめてはいない。「吠える犬」初出形最終聯に見られる「洞察なき隣人のために銃を以つて撃たるるまで、汝が餓死するに及ぶまで、汝が『謎』を語ることを止めざる最後にまで」吠えることを止めない。〈犬〉は、死ぬそのときまで吠え続ける。このとき、朔太郎は真つ先に銃殺のような他者からの危害で死ぬことを想定して吠え続けることを描く。それは本質的なものを切実に希求する姿勢ではない。地中にある見えないものに感応すること、周囲から「狂号する」者、狂つたものであると判断されても、彼はむしろさういつた存在に積極的にならうとし続ける。それは、ここではむしろ決意であり、『謎』を突きつける〈月〉への——自らが〈疾患〉していることを突きつける健康な外界への抵抗であつたと言えるのではないか。

6 〈月〉に吠える〈犬〉

ここまで、〈犬〉と〈月〉の關係の変遷から〈吠える犬〉に関して考察してきた。しかし同時に、〈犬〉が吠えるという行為は、応答を求めての行為であると捉えることもできる。そのように考えたときに、〈月〉はどのような意味を持つのか。

自序及び〈吠える犬〉詩における犬は、遠吠えをしている。つ

まり、彼は周囲にコミュニケーションを取るべき対象がないのである。そこで〈犬〉の吠える声を受け取るのが〈月〉である。したがって、〈月〉は、むしろ〈犬〉に親しみを持つて呼びかけられている存在であると言いうこともできる。このように〈月〉は〈犬〉に敵対するものであり、近しいものでもあるという両義性を持つものではないか。

また、〈犬〉は吠えることによつて意思疎通を図る存在である。逆に、吠えることによつてしか意志を伝えることができない。それは、〈犬〉が言語を用いることができない存在であるということとを改めて意味するだろう。しかし、〈犬〉≡〈詩人〉の図式を思い返すならば、〈詩人〉は言語を用いることができないのではない。〈詩人〉が言語では伝えることができない事柄を抱えていることを意味するのである。それはつまるどころ、「詩は言葉以上の言葉」という朔太郎の実感に他ならない。そして、さらに考えれば、〈犬〉の吠える声を受け取るのが〈月〉であることと〈犬〉が吠えることにより意思疎通を図る存在であることは、〈犬〉が〈月〉に応答を求めていることを示す。では、それに対する〈月〉の応答はいかなるものであったらうか。〈月〉に吠える〈犬〉に対して、〈月〉が吠えて応答することはない。〈犬〉の遠い〈月〉への親近感を込めた切実な声は、客観的に見れば届いているのかさえ不明なままになってしまふ。この応答のない一方通行のコミュニケーションは、孤独とさびしさに結びつく。詩集全体を貫く〈犬〉は、〈犬〉の存在しない作品にも表れる孤独やさびしさをまとめあげる。

そして、この応答のないという事実は、再び朔太郎に〈健康な

外界〉を突きつける。〈犬〉と〈月〉にはコミュニケーションにおいて欠陥が存在する。だからこそ〈犬〉の声は遠吠えとしてしか処理されず、応答もない。そこには理解不能という溝が横たわっているからである。「悲しい月夜」においては、ただ「合唱してゐる、合唱してゐる」というリフレインのみが戻ってくる。ここで言う「黄いろい娘たち」の「合唱」は、波止場に打ち寄せる波に反射し分裂して揺れる〈月〉の光と見ることができよう。しかし、〈犬〉の吠える声と同様にその内容は問題にされず、〈犬〉と〈月〉が意思疎通を行うことができたと言ひ難い。〈犬〉と〈月〉は相互に理解をしていないため、そのどちらもの声が背景に溶け込むように遠く響くのである。その無理解は、〈犬〉と〈月〉の結びつき自体に若干の問題を孕んでいるために起きるのではないか。

一般的に、〈月〉と結びつく獣と言へば、「狼」が挙げられるだろう。狼男の伝説は語り継がれ、世代を問わず馴染みの無いものは多くないと思われる。ここで考えなければならぬのは、「狼」と「犬」は同一の生き物ではないということである。朔太郎においても〈狼〉と〈犬〉とは明確に区別されて用いられている。この「狼」と「犬」という生き物そのものを比較すると、「犬」の方が飼育され人間に近い存在として理解できよう。そのとき、「狼」という「月」と結びついて伝説を成すような生物に比して、「犬」は人間という現実に近い、神秘を共有できない存在として浮かび上がってくる。実際、「吠える犬」の決定稿は、「詩」や「謎」という神秘に繋がりが得る要素が排除され、より宿命論的になり、神秘を信じない存在としての〈犬〉の姿を描く。その神秘の共有不

能が理解不能として、〈健康な外界〉と〈疾患〉に重なるのである。

7 おわりに

『月に吠える』期には四篇の〈吠える犬〉詩が発表された。そして、これまで、それらの詩篇においての〈犬〉は〈詩人〉の分身と見られてきた。〈吠える犬〉には、その特徴として〈疾患〉の描写が多くあるが、その描写は変遷している。他の特徴として、〈吠える犬〉詩には〈月〉が〈詩人〉と〈犬〉を媒介する存在として登場することがこれまで指摘されてきた。しかし、その二者の結びつきについての論考は乏しかった。本稿では、〈月〉に〈犬〉が照らされることによって詩の景が現れることから、〈月〉は〈犬〉の変遷に関わるものと考えた。つまり、〈月〉は単なる〈犬〉と詩人の媒介以上の意味を担うのである。『月に吠える』期の〈吠える犬〉詩には、特にその〈犬〉の描写によって〈疾患〉の認識の変遷が色濃く映っていた。〈吠える犬〉詩に限らず、〈月〉という発光体は朔太郎詩において健康体の象徴であり、〈疾患〉を背負う〈犬〉とは対照的な存在である。そして、朔太郎は、その〈疾患〉という『謎』を抱えた〈犬〉を〈月〉と共に描き続けた。その結果、〈月〉を健康体として見るとき、ちょうど〈犬〉が〈月〉に照らされて姿を顕わにするように、〈犬〉の〈疾患〉は〈月〉という健康な外界によって突きつけられるものとして浮かび上がることとなったのである。そのとき、吠える行為は自らの〈疾患〉を突きつけるものへの怯え——すなわち健康な外界へ

の抵抗となる。また、ここでの吠える行為は遠くに対して行われる。それは身近に意思疎通を図るべき対象がない孤独を表す。そして、そのとき〈犬〉の声を唯一受け取る〈月〉は、〈犬〉の抵抗の対象という敵対する存在としてのみならず、〈犬〉が意思疎通を図ろうと親しみを込めて呼びかける対象となるのである。さらに、そのような親和性のある関係の存在として〈月〉と〈犬〉を改めて眺めたとき、〈犬〉は一般的により〈月〉と共に語られることの多い「狼」に比して人間に近い存在であることに気が付く。そこでの〈犬〉は、神秘を共有できない存在である人間と重なり、健康な外界と自らの〈疾患〉の相互に理解しない姿を表している。

作品本文は筑摩書房版『萩原朔太郎全集 補訂版』一卷（一九八六・一〇）、同二巻（一九八六・一一）、同二二巻（一九八七・九）に拠る。引用に際し、原則として旧字は新字に改めた。

注

(1) 二〇二二年一二月、前橋市に十冊程度しか現存が確認されていない『月に吠える』初版無削除版が寄贈された。また、二〇二二年は朔太郎の没後八〇周年という節目の年である。これらのことから、『月に吠える』は再注目の対象となっている。

(2) 「詩集『月に吠える』に就て諸名家の言葉」や、加藤介春「『月に吠える』雑感」・多田不二「詩集『月に吠える』及び萩原朔太郎氏の芸術を論ず」（両者とも『感情』二巻五号、冬至書房新社、一九一七・五に掲載）において好ましい評価が散見される。ただし、『感情』は朔太郎が同人として参加している雑誌である

ことには留意すべきだろう。朔太郎本人も「月に吠える」「再版の序」において、再版の契機を「最初市場に出した少数の詩集は、人人によって手から手へ譲られ奪ひあひの有様となつた。古本屋は法外の高価でそれを皆に売りつけて居た。(古本の時価は最初の定価の五倍にもなつて居た)。私の許へは幾通となく未知の人人から手紙が来た。どうにもして再版を出してくれといふ督促の書簡である」と述べており、当時の詩集への評価が窺える。

(3) 「悲しい月夜」章と「くさつた蛤」章は詩集の中で隣り合っている。「悲しい月夜」章には一九一四〔大正三〕・一〇一―同一二
月発表作と一九一五〔大正四〕・六発表作、「くさつた蛤」章には一九一五〔大正四〕・四―同六月発表作と一九一六〔大正五〕・五発表作がそれぞれ配されている。また、「見知らぬ犬」章は一九一六〔大正五〕・九―一九一七〔大正六〕・一以降の発表作が収録されている。このうち、一九一七〔大正六〕・一以降の発表作の雑誌掲載形の末尾には「詩集『月に吠える』より」(表記に若干の異同あり)と記されており、朔太郎自身も「いろいろな事情から『月に吠える』の出版がおくれてしまつた。それで気がぬける恐れがあるので、詩集中から未発表の作で比較的新しい傾向に属するもの二、三篇を選んで先月号と今月号の『感情』に転載することにした。」(『編輯記事』、『感情』第二巻第二号、感情詩社、一九一七〔大正六〕・二)と述べている。以上のことから、この頃の作品は詩集収録作としての性格が先行していると言える。

(4) 「蝶を夢む」は「蝶を夢む」「松葉に光る」の二章に分けられている。前者は第二詩集『青猫』(新潮社、一九二二〔大正一〕・一)、後者は第一詩集『月に吠える』(感情詩社・白日社、一九一七〔大正六〕・二)の拾遺を収録している。

(5) 星野徹「萩原朔太郎における象徴的イメージ——〈土壌〉と〈犬〉について」、『国文学 解釈と教材の研究』一八巻一四号、

学燈社、一九七三・一

(6) 清岡卓行「犬と鳥と猫——萩原朔太郎『猫町』私論VI——」、

『文学界』二八巻一号、文芸春秋社、一九七四・一

(7) 磯田光一「月に吠える犬(続)——萩原朔太郎(六)、『群像』

四一巻二号、講談社、一九八六・二

(8) 勝原晴希「萩原朔太郎の試行——〈吠える犬〉とは何か——」、『国語と国文学』六四巻八号、至文堂、一九八七・八。啄木

歌へわが泣くとは、一九一〇〔明治四三〕年一二月初版発行の「握の砂」「我を愛する歌」に収録された「わが泣くを少女等きかば／病犬の／月に吠ゆるに似たりといふらむ」を指す(作品引用は『石川啄木全集 第一巻』、筑摩書房、一九七八・五による)。(吠える犬) 詩以前に制作され「純情小曲集」に収められた「愛憐詩篇」中の諸篇に「我を愛する歌」の影響が見られることや、「握の砂」から題材と口ぶりを借りて「一群の鳥」という十三首の短歌を発表していたことは田村圭司が指摘している。また、「幻影と謎」はニーチェ『ツアラトウストラ』第三篇「幻影と謎」の項のこと。明治四四年一月に、生田長江訳のものが刊行された。

(9) 梁東国「日韓近代詩における〈吠える犬〉のイメージ——萩原朔太郎を中心に——」、『比較文学研究』六四号、恒文社、一九九三・一一

(10) 坂井明彦「萩原朔太郎の〈青〉と〈白〉——『月に吠える』から『青猫』へ——」、『日本文学文化』二号、東洋大学日本文学研究学会事務局、二〇〇二

(11) 注5に同じ。

(12) NDL Ngram Viewer において一八六〇年以降の「吠える」の語の用例を調べると、「〜の吠える」という用法の次に「〜に吠える」の形が多く用いられていることがわかる。しかし、その

「月に吠える」の用例は詩集『月に吠える』及び詩集中の「月に吠える」行為以外にあまり存在しない。また、その「月に吠える」に関連しない例においては、吠える対象は人間であることが多い。「月に吠える」という形での例は、『月に吠える』刊行以前には森鷗外訳『ファウスト』（富山房、一九一三）が存在する程度である。さらに、『月に吠える』以後の「月に吠える」の例もほとんどが詩集『月に吠える』への言及である。そのような意味でも、詩集『月に吠える』が詩壇に与えた影響や、朔太郎詩において月と犬が結びつくことの独自性が窺える。

- (13) 安藤靖彦「詩語」の解析 犬、『国文学 解釈と教材の研究』三四巻七号、学燈社、一九八九・六。「蛙の死」は『月に吠える』「悲しい月夜」章収録。初出は『詩歌』第五巻第六号、一九一五（大正四）・六。「白い月」は『月に吠える』「さびしい情欲」章収録。初出未詳。「月影ある人生へ」は『文章世界』第一四巻第八号、一九一九（大正八）・八に掲載されたが、単行本未収録の作品である。本作は散文詩でありながらアフォリズムの性格を持つ。「月影ある人生へ」の月とは、同論文の引用部直前にある「神の如きもの、絶対の如きもの、理性の如きもの、至上善の如きもの」の「微光ある地平線」に消えてのちに登ってくる「恐ろしい大きな月」を指す。

- (14) 関口典子「疾患」から「浄罪」へ——萩原朔太郎論——、『学習院大学国語国文学会誌』二二巻、学習院大学、一九七八
未発表。創作ノートより。

- (16) 同時期の作品にも〈狼〉が描かれているものがある。『蝶を夢む』「松葉に光る」章収録「狼」（初出は『詩歌』第五巻第一号、一九一五（大正四）・一、初出発表時には「東京遊行詩篇——十月下旬滞京中作——」とあり、「遠景」すなわち『月に吠える』「悲しい月夜」章収録の「かなしい遠景」の初出形と共に掲載）

や同収録「有害なる動物」（初出は『水壷』第二巻第一号、一九一五（大正四）・一）における〈狼〉は、吠えることではなく疾行することに重点が置かれている。先行研究では、〈吠える犬〉の解釈の際にこれらの詩を用い、〈狼〉を〈犬〉の延長上の生き物として扱っているものもある。また、後年の〈狼〉が描かれた作品の例として、アフォリズム拾遺中の散文詩「病気の狼」（初出は『文章世界』第一四巻第八号、一九一九（大正八）・八）が挙げられる。ここには「月光の夜」「彼のみすばらしい影」といった〈犬〉と共に見られるものに似た記述がある。

（おきつ） さくら 本学文学部文学科日本文学専修